

### <3階>

3階では、正倉の屋根が見えます。地面から屋根の上までの高さは約14 m になります。傷んだ瓦は取り替えて、建物がながもちするように、というのが100年ぶりに工事をおこなう大きな目的です。今は約36,000枚もの瓦を全ておろした状態です。瓦1枚1枚を職人さんが目で見たり叩いた音を聞いたりして、使えるかどうか判断しています。

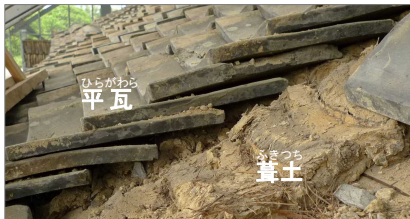


瓦を1枚ずつ取り外し確認の様子

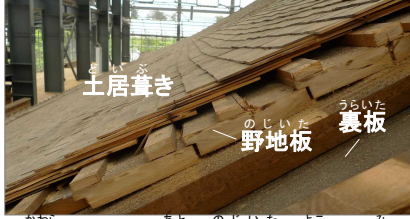
また、屋根を支える構造の補強工事のために屋根面に穴を開けました。「本瓦葺き」の下には、薄い木の板を重ねた「土居葺き」があり、その下には厚い「野地板」、さらに屋根裏の天井になる「裏板」がありました。このように屋根面を瓦や板で念入りに重ね、野地板同士の合わせ目は水が入り込みにくくしています。昔の人が宝物をぜったいに雨で濡らさないように工夫した様子が分かります。



①丸瓦を一部おろした後に上から見る



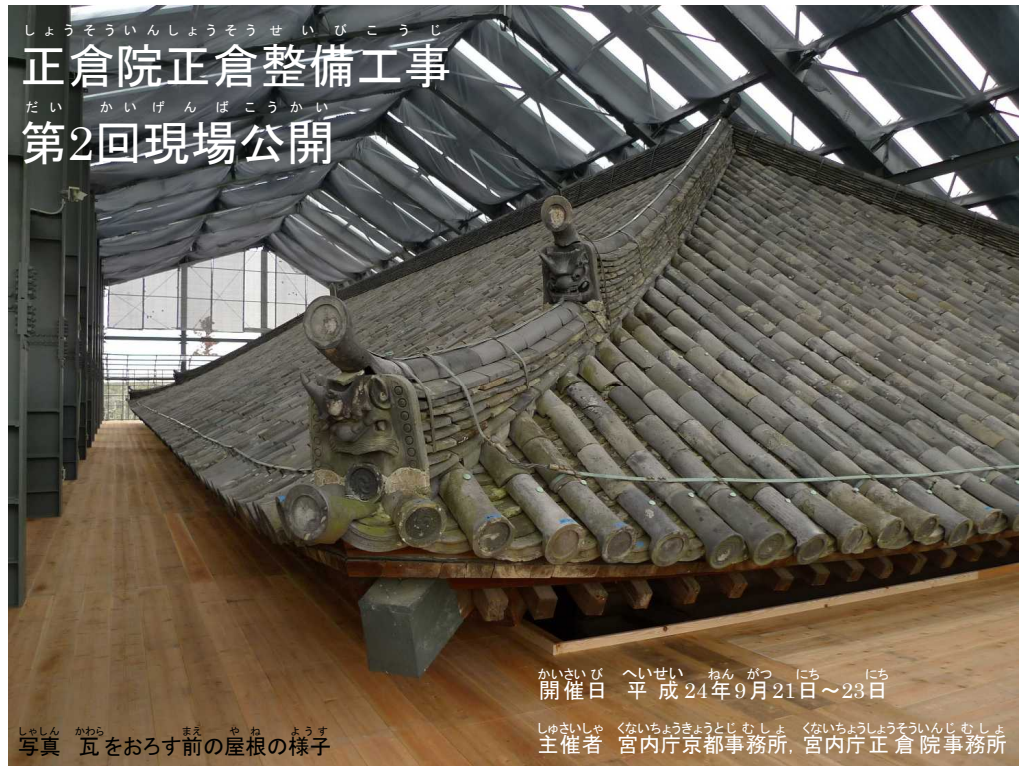
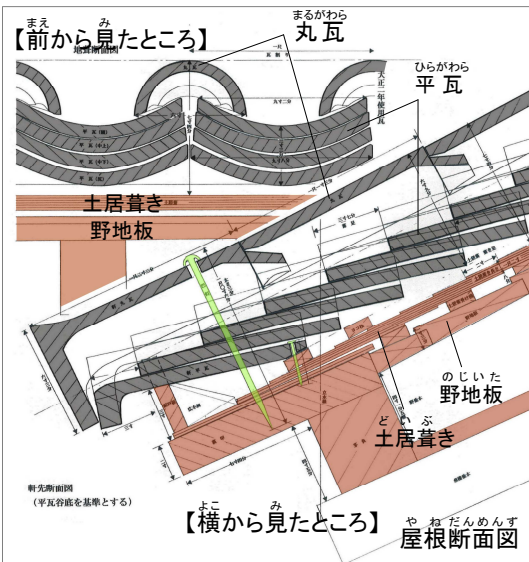
②丸瓦をおろした後に平瓦を横から見る



③瓦をおろした後に野地板を横から見る

周囲の景色も、この機会で見られなげつ景です。帰り道は、順路を守り、足元に気をつけて降りていって下さい。

見学ありがとうございました。



開催日 平成24年9月21日～23日  
主催者 宮内庁京都事務所、宮内庁正倉院事務所  
写真 瓦をおろす前の屋根の様子

正倉は、長いあいだ正倉院宝物を守ってきた倉庫です。現在、国宝に指定されています。

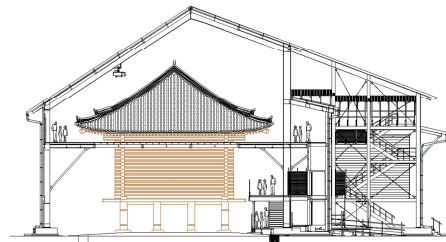
都が奈良におかれた奈良時代の中ごろ、聖武天皇が東大寺を開き、大仏を造りました。正倉は、はじめは東大寺の倉として建てられ、正倉院の宝物も、もともと聖武天皇ゆかりの品や、東大寺で使われた品でした。正倉がこの年に建てられた、という正確な時期はわかりませんが、聖武天皇が亡くなった西暦756年に近い頃と考えようでしょう。大仏開眼の儀式が盛大に行われてから、あまりたっていない頃です。

今回の整備工事は、大正2年以来の約100年ぶりとなる本格的な工事です。大正の時は屋根・壁・柱など全てを一度解体して組み立て直す工事でしたが、今回は校木の壁や柱などの解体は行わず屋根の瓦の葺き替えと建物の構造補強を行います。

正倉の姿は、写真でよく知られていますが、今回の公開では、それとは違った迫力ある姿が感じられるでしょう。でも、古い建物です。手でさわっただけでも、建物は傷みますので、さわらないようにしましょう。見学ルートは工事現場内でもあります。順路を守り、足元に気をつけて見学してください。

けんがくあんない  
【見学案内】

みなさんがけんがくで歩く建物は素屋根とい  
います。素屋根は、工事をする時に正倉を  
雨から守るため、その外側におおいかけた  
たてものしょうそうこうじしゅうりょうごとはず  
建物です。正倉の工事終了後には取り外し  
ます。この素屋根の大きさは、約35 m × 約  
48 m で、高さは約19 m です。



すやねがいようす  
素屋根の概要図



こうじまえがいけん  
工事前外観



すやねこうじちゆう  
素屋根工事中

<2階>

2階上がると、独立した入り口をもつ三  
つの倉が並ぶ正倉の構造がよくわかりま  
す。北(正面向かって右)から順に、  
北倉・中倉・南倉という名前がついていま  
すが、三角の校木を組み上げた両端の倉  
(校倉造り)と、あいだに挟まれた中倉の  
作り方の違いに気がつきましたか？ そう、  
中倉は校木を使わず、板で壁を造ってい  
ます(板倉造り)。材木は檜。建物正面の  
長さ(間口)は約33 m です。



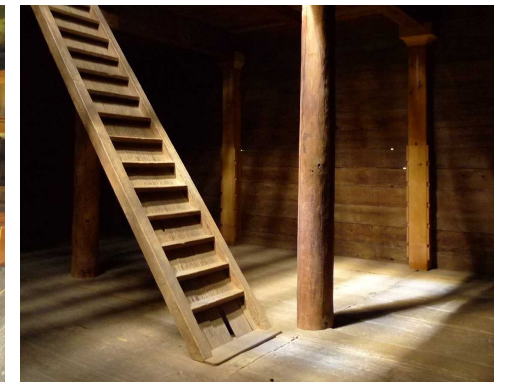
あぜぎだんめん  
校木の断面

正倉に宝物が入っていた頃は、天皇の許しが無いと扉が開けられないため勅封倉と  
よばれていました。今回の現場公開では、中倉は入口の錠前に縄で封をして勅封倉で  
あった頃の扉の閉め方を再現しています。南倉で展示してあるように普段はこの上に木  
の箱をかぶせて雨風をしのぎます。

北倉の扉が開いていますね。のぞいてみて下さい。工事のために明治時代に造られ  
た展示ケースを搬出し、屋根面にあけた開口から太陽の光が入ってきています。壁は  
普段見ることができない校木の内側です。



こうじまえちゆうそうないぶ  
工事前の中倉内部



けんさいほくそうないぶ  
現在の北倉内部

<1階>

1階では、倉を支える40本の束柱が見  
えます。この床下の高さが約2.7 m。自然  
石の礎石の上に立っており、束柱の直径  
は60cm程です。

一部の束柱は鎌倉時代に交換してい  
ますが、それ以外の束柱はほとんど創建  
当時の木だと思われます。じっくり観察し  
てみてください。表面がもろくなってデコボ  
コしています。約1250年も正倉を支えて  
雨風に耐えてきた証です。

束柱に巻いてある鉄のタガや台輪の  
銅板は江戸時代につけられたものです。  
これらの一部は錆などでわるくなっていま  
すが、今回の工事では特に修理はせずそ  
のままにしておきます。



だいわ  
台輪  
そせき  
礎石  
つかばしら  
束柱  
タガ